

帝京大学学生のための「日本経済史」入門講座

第一回 ソースタイン・ヴェブレンとその発展段階説

佐藤光宣

第一章 はじめに

経済史 (economic history) は歴史学の一分野であり、政治史や文化史、科学と技術の発達史、宗教や教育および外交の歴史とも一定の関連をもつが、言うまでもなく固有な意味での経済学と密接な関連をもっている。経済史は、悠遠の過去から現今に至る人間生活の経済的局を、実証可能な客観的史実のもとに考察の対象とするからである。それゆえ、「日本経済史Ⅰ」および「日本経済史Ⅱ」の講義科目は、帝京大学の文系学部の学生諸君のなかでも、とりわけ文学部史学科に所属する受講生諸君の求知心を一層触発しうる属性をもつ、と言うべきであろう。それゆえ、これらの講義内容の理解は総じて困難ではなく、かかる有意の諸君にとっては比較的容易であるとさえ思われる。

さて、二〇〇五年（平成十七年）度の前期における「日本経済史Ⅰ」の講義において私は、その実質的部分を、アメリカにおける制度派経済学の創始者であるソースタイン・ヴェブレン（Thorstein Veblen）とその文化の発展段階説を詳述することから開始した。ヴェブレンの発展段階説は、有閑階級の生成と発展とを究明してゆく際の歴史の舞台であるばかりでなく、日本経済の歴史を考究するうえでも頗る有益であろうと考えられたからである。それゆえ、本講義に若干の特色を敢えて求めるならば、それは制度主義⁽¹⁾（Institutionalism）の見地に基づく日本経済史の初歩的考察に存する、と言えるであろう。

このような趣意に基づいて、前期講義において私は、原始共同体時代から連綿として続く生活史の経済的局面向を、近世、そして近代に至るまで跡付けた。その際、日本経済の歴史を制度の累積的変化の過程として描き、もってこれを批判的に概観することを目的としたのであった。かくして、極めて不安定な現今の経済社会に代わって、より平和で安定的かつ持続可能な経済社会のあるべき姿を、史実に即して虚心坦懐に探究しようと試みたのであった。悠久な時の流れとともに経済生活にもたらされた累積的変化を正しく認識することは、我々の視程を現代から未来へと開いてくれるのである。それゆえ、学生諸君に対して、「歴史に学び、歴史の理解をもって未来を解く鍵にする」という精神的態度のもとに熱心に聴講することを、ひたすら切望した次第である。

ともあれ、実際の講義は、毎回その内容ごとに難易の差が確かにあったし、またそのことと多少の関係があつてのことゆえか、知的好奇心の濃淡とそれに基づく反応の度合いの強弱が、学生諸君全般の傾向として見られもした。しかし、難解ではあつても、その知的好奇心を多少なりとも触発し得た内容を含む講義もあつたであろう。その好例は、ソースタイン・ヴェブレンとその処女作『有閑階級の理論』（*The Theory of the Leisure Class*, 1899）

ならびに彼の文化の発展段階説を論題の中心とする講義であった。このような実情に加えて、ヴェブレンの社会経済思想やその発展段階説は、ことに経済史という学問領域の理解の正鵠を射るに不可欠の論題であるから、ここに若干の筆をとって補説することに益するところ少なくないものと私は考えた次第である。

その際、ヴェブレンの略歴^②や基本的見地、その独特な制度の概念と発展段階説を、その著『有閑階級の理論』の学問的意義と価値とを視野に置いて自由に論ずることができるならば、それは次年度以降、新たに「日本経済史」の諸講義に臨む学生諸君に対しても、本稿は一読を勧められるものになるはずである。それゆえ私は、それらの諸論点をめぐってヴェブレンの立場から解説し、もってこれを「日本経済史」入門講座の第一回としてまとめることにした。⁽³⁾

なお、本稿を執筆するに際しては、入門講座でありながらも教科書的な公認の知識の範囲に、これを収めようとは取えてしなかつた。また、ヴェブレンの一言一句の引用に終始することは、これも意識的に避けた。むしろ、言々肺腑を衝くヴェブレンの『有閑階級の理論』を、能う限り自分の言葉に置き換えて解説しようとした。したがって、その解説部分とヴェブレンの言説との線引きが、判然としていないことに学生諸君は気づくであろう。学問的正確さを期すことは当然であるが、それと同等程度に、学生諸君の理解に供することを目指した。

第二章 ソースタイン・ヴェブレンの略歴

ソースタイン・ヴェブレンは、十九世紀から二〇世紀初頭にかけて活躍したアメリカの経済学者である。⁽⁴⁾

その生涯は、開拓期からフロンティアの消滅そして大企業の出現から独占段階に移行してゆく時期に、ほぼ重なり合っている。彼は一八五七年七月三十日にノルウェー移民の子としてウイスコンシン州のある開拓農場で生まれたが、それは両親がノルウェーからアメリカに移り住んで十年後のことであった。当時、北欧系の移民は東部アメリカ人の根深い蔑視に晒されており、ノルウェー人たちはそのような環境のなか移民として自給自足的な農民社会を形成していたが、これと対極的に、いわゆるこのヤンキー (Yankee) は金銭的利得の追求に余念がなかった。やがてヴェブレレン一家は、一八六五年にミネソタ州のノルウェー人の移民村に移り住んだ。

一八七四年にヴェブレレンは、ミネソタ州のカールトン・カレッジ (Carleton College) に入学した。カリキュラムの中心は、古典、宗教、道徳哲学であった。ヴェブレレンがそこで初めて学んだ経済学は、道徳哲学的観点を濃厚に含む俗流古典派経済学の域を出ないものであり、さらにそれを組合教会派 (Congregationalism) の神学的教義に焼き直した類のものであった。この経済学に批判的であったのが、ドイツ留学から帰米したばかりの若きジョン・ベイツ・クラーク (John Bates Clark) であった。クラークはアマースト大学 (Amherst College) を卒業後、チューリッヒ大学 (Universität Zürich) とハイデルベルク大学 (Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg) に留学し、二八歳でカールトン・カレッジの教壇に立っていたのであった。クラークは、やがてアメリカ人として初めて世界的名声を博する理論経済学者の巨頭の一人名となったが、彼のヴェブレレンに対する庇護は後年まで途絶えることがなかった。もともとヴェブレレンは、後々、クラークの経済学体系とは異なる、いわゆる「進化論的経済学」(“evolutionary economics”) の建設に向かった。なお、一八八〇年に彼がカールトン・カレッジを卒業するまでのほぼ全期間に渡って、アメリカ経済は恐慌後の不況から抜け出せないでいた。そのような経済的環境

を背景として、ヴェブレンは現実問題にとりわけ鋭い関心を示し、ヘンリー・ジョージ (Henry George) の『進歩と貧困』 (*Progress and Poverty*, 1879) への賛意を忌憚なく公言した、と言われている。

カールトン・カレッジを卒業してからの一年間、ヴェブレンはルター派の高等学校であるモノナ・アカデミー (Monona Academy) に数学教師として勤めた。この学校が経営難で閉鎖されると、ヴェブレンは哲学研究を主眼に置くべく学窓に戻ろうと決意し、ジョーンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) の大学院に進んだ。実際のところ彼は、哲学研究のみならず経済学に一層の学問的関心をもつようになっていたようである。ともあれ、ヴェブレンは、チャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) の講義には、とりわけ関心をもつにいたったのであった。パースは弱齢から秀優の誉れ高く、後年に至って学問の多領域に渡って異彩を放ったアメリカの哲学者であり、また論理学者、物理学者でもある。そしてまた、プラグマティズムの創始者の一人であり、現代記号論の先駆者ともなった。そのパースにとつて、思考は現実の問題を解決するための道具と考えられたし、思考作用と行動の習慣に関するパースの講義は、若きヴェブレンに深い印象を与えたと見ることができよう。

ともあれ、ジョーンズ・ホプキンス大学は、ヴェブレンの知的好奇心をそこにいつまでも繋ぎ止めることはできなかつた。ほどなく彼は、一八八二年にイエール大学 (Yale College) に転じた。そこでヴェブレンは、二人の学問的指導者に巡り合うことができた。一人は、哲学者としてカント哲学の研究にヴェブレンを導いた、当時のイエール大学学長のノーア・ポーター (Noah Porter) であり、もう一人はウィリアム・グラハム・サムナー (William Graham Sumner) であつた。サムナーはハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の熱烈な支持者で

あった。社会の進歩は自然の進歩と同様に生存競争であつて不平等の原理が貫徹しており、それゆゑ「社会淘汰」(“social selection”)や「適者生存」(“survival of the fittest”)が生まれるのだと彼は主張して、社会進化論(social evolutionism)を叙説したのであった。ヴェブレンは、この保守的な思想を受け入れられなかつたけれども、サムナーを通じて進化論的な諸概念の多くに接したことは間違ひなからう。ほどなくヴェブレンは、スペインとイマヌエル・カント(Immanuel Kant)の研究を中心とする論文をポーターに提出し、一八八四年に学位を得た。

かくして、ヴェブレンは大学への就職の機会を待ち受けることとなり、実際、学界の有力者たちの推薦状を手にしてゐた。しかしながら、その就職活動はいずれも不成功に終わったばかりか、これ以降、七年間の長きに渡り浪人生活を強いられることにすらなつた。そこで一計を案じた兄のアンドリュウ(Andrew Anderson Veblen)は大学院への再入学をヴェブレンに勧めるところとなり、一八九一年にコーネル大学(Cornell University)の大学院に彼は入学した。ヴェブレンはその年の冬、大学での学生生活に復帰した後、ジェームス・ローレンス・ラフリン(James Laurence Laughlin)の指導を受けることとなり、「社会主義理論における若干の閑却された点」(Some Neglected Points in the Theory of Socialism)と題する論文を逸早く発表した。ラフリンは、一八九二年に新設のシカゴ大学(University of Chicago)の経済学部長に就任することとなつた折、ヴェブレンを伴つてゐた。そして、ティーチング・フェロウ(大学院の研究助手)に採用されたヴェブレンは、三五歳にして学界に躍り出ることとなつた。こうしてヴェブレンの処女作『有閑階級の理論』は、そのシカゴ大学在職時に陽の目を見たのであつた。

シカゴ大学の在職期間は、大学を転々とすることになるヴェブレンとしては最も長期に渡ったが、一九〇六年からはスタンフォード大学 (Stanford University) に移った。さらに、一九〇九年にはミズーリ大学 (University of Missouri) へと彼は移っていった。当時の学界においてはヴェブレンはいわば思想的に異端の立場にあったこと、その性格が教職に不向きと見られたことなどから、彼はアカデミズム (Academism) の世界に馴染めなかったと見られている。

やがて彼は、政府の調査事業のためワシントンへ赴いた。さらにヴェブレンは、雑誌『ダイヤル』 (*The Dial*) の主筆となり、また新社会科学学院 (New School for Social Research) という私立の夜間大学の講師としてニューヨークへ移った。一九二七年以降は、カリフォルニア州のパロアルト (Palo Alto) の山荘に引き籠もって貧困と孤独の生活を送ったヴェブレンは、一九二九年八月三日、大恐慌の直前に他界した。経済的破局は、かねてヴェブレンの予想通りに起こったのであった。ヴェブレンについての著名な伝記を著したジョゼフ・ドーファン (Joseph Dorfman) は、あの忘れ難い出来事が始まるほんの数ヶ月前にヴェブレンは悲憤慷慨の士として世を去った、⁽⁵⁾ と述懐している。

第三章 ヴェブレンの『有閑階級の理論』とその基本的見地

アメリカにおける制度主義という知的な運動の創始者であるロースタイン・ヴェブレンは、その著『有閑階級の理論』において、有閑階級の「諸制度の進化に関する経済学的研究」⁽⁶⁾ を行った。この著作は、経済学のみ

ならず、その当時までに得られていた広範な学問分野の研究成果を適宜に取り入れながら、独占段階のアメリカ資本主義の性質と機能とをその主要な研究課題として著された名著である。したがって、『有閑階級の理論』は、いわば近代資本主義論と言うべき内容を含んでおり、その価値は今日でも決して色褪せることはない。

『有閑階級の理論』の「有閑 (leisure) とは、まずは「暇」を意味する。けれども、「暇」といっても種々の意味を含む。たとえば、「継続する動作の合間に生じるわずかな時間」、「休日と休暇」、さらに「人間的関係を絶つこと」が、「暇」という語の一般的な意味に含まれる。しかし、これらの意味するところは、ヴェブレンが用いる「有閑」という語の説明に充てられる「暇」の語義に、いずれも完全には一致しない。そのなかにあつて、「休日と休暇」については、幾分か近接した意味を含むかも知れない。けれども、相も変わらぬ仕事翌日に待ち受けるなか身辺の雑事に追われる「休日」であつたり、滅多に出ることのない旅ではお仕着せの強行日程でお決まりの過ごし方を強要されたために疲労困憊に陥つた「休暇」というのが実情であるならば、それらはヴェブレン的な「暇」の語義から酷く懸け離れている。

ヴェブレンが用いる「暇」という語は、確かに、物理的に計時可能と期待されるものではある。けれども、プライベートビーチで時計とともに暮らす一夏の精神的滞積物としての時間は、物理的なものに果たして還元されうるか、甚だ心許ない。それゆえ、その語は、誰から見ても確認できる程度を超える長さをもつた連続的な時間を指す、とまずは考えておくことが妥当な線と言えよう。しかし、実際のところ「暇」という語は、斯くの如く肉体とともに精神が日常生活から超然として自由な状態を意味し、また無為に過ごしうる生活過程の断面であつて、その当事者以外の者の眼には恐らく優雅で緩慢なものと映るであろうものを、より強く指示する。こ

れこそが、ヴェブレンが用いる「有閑」の説明に充てられる「暇」の意味内容に一層近づく。しかし、これでも核心には至らない。ヴェブレンが「有閑」という語なり「暇」という語なりに込めた意味は、実はそれ以上のものを一歩踏み込んで指し示すのである。すなわち、「有閑」とは、ヴェブレンの言葉遣いにおいては、「肉体労働からの免除もしくは禁絶」を核心的に意味するのである。

それゆえ、ヴェブレンはここで、文学者としてではなく経済学者として、「有閑」の意味を解していると言えるであろう。もともと、ヴェブレンは、複雑な経済事象の表現者の任に当たる際には、文学者然として立ち現れる。ヴェブレンの人間観察は優れた文学者のように異様なまでに鋭く、また、事の本質を抉り出すようなその達意の文章は読み手の感受性を豊かにさえる。ヴェブレンに対するこのような折衷的な評価が可能であるならば、彼は心理学者として事に当たったと付け加えることもできるが、独特な修辭に富んだその文体や一言一句は、並はずれた文学的資質を示すものである。このように、経済学者としての彼の本体には、多様な学問的能力を見出すことができる。

さて、ヴェブレンは、有閑階級をその職業から捉える。有閑階級の職業は、政治、軍事、宗教およびスポーツから構成される。通常、それらは、肉体労働から免除もしくは除外され、名誉ある階級に留まる。最高の地位に位する有閑階級に対しては、肉体労働の禁絶という諸力が常に働く。彼らは産業過程の直接の従事者ではない。そればかりではなく、たとえ産業過程から除外されても生活の困窮には直面しないことを、損害と見紛うばかりの豪華な消費によって証拠立てる習性をもつにいたった、いわば余剰生産物の寄生生活者とさえ見られる。

このように、有閑階級の成員は時間を非生産的に消費するが、また同時に金銭の浪費にも腐心するのである。

このことは、金銭的な規準のもとでの特定の趣味に対する彼らの偏愛に、その具体的事例が見て取れる。たとえばコルセット、十二単および纏足は、その装用の効果なり肉體変形作業の遂行が肉體労働を常とする者の必要に迫られた結果として現れたものと見なすよりは、まったく逆の経済的圧力の欲求から出発したもの、と考えられるべきであろう。すなわち、それらの趣味は、自分が有閑階級の成員であることを誰の目から見ても一目瞭然のうちには知らしめねばならない、という精神的必要のもとに発生したと言えるであろう。

コルセット、十二単および纏足などの有閑階級に受容された趣味は、彼らの暇を表象する。その効果は、肉體労働から完全に切り離されていること、なおかつ高い水準の生活が続行可能であること、という極めて高い経済力の平面を表示することにある。したがって、それらの趣味の諸項目のなかには名譽の感覚が付着しており、これが成長してもくるが、それが最終的に転がり込む先は、それら金の酷くかかる趣味に誠心誠意没頭する者ではなく、その優雅な人間的素材を養っている主人である。通常、その主人は、かなりな程度に達した有閑階級の男性ということになる。その男性にとつて、優雅な身の振る舞いの洗練された趣味に明け暮れる女性を妻とするとは、名譽なことである。妻は、妾宅を守る妻の代理人がそうであるのと同様に、かかる男性の金銭支出能力の証拠物件となるからである。この能力の多寡ほど、社会的実力の判断材料として願ったり叶ったりするのは、なかなか見つからないであろう。物事の道理を精妙にわきまえた金のかかる女性たちは、これを庇護する有閑紳士たる男性に金銭的損害をこれ見よがしに絶妙のタイミングで与えることをもって、その男に経済的効果をもたらすのである。この効果を見栄というような心理的な範囲のなかで論ずることは、もはや無理というものである。このような有閑階級の浪費的な生活風習は、社会全体に拡散するからである。拡散してから後それが維持される

からには、精神的必要を満たすべく成長したものが、一層実質を得てきたのである。見栄は競争に体现し、競争自体に価値を見出したのである。

取り立てて言うほどの話ではないが、身なりが良く、洗練された内面が隠しようもなくその物腰なり語り口に現れるような男性であつてこそ、かつまた実利的には金離れの良い男が、場末の酒場においてさえ良く人気を博するものである。この男が、その場で生じた偶発的な揉め事を頑健な身体的能力の發揮のもとに見事に収め得たならば、その場に居合わせた気弱で平和的であろうと推定されるが何やら胡散臭さを拭いきれない比較的数量の酔客たちの感覚のなかで、彼は遂に有閑紳士の要件を揃えた立派な人物となる。一種の興奮状態に包まれたその場の空気が、彼の發揮した掠奪的な精神に高い点数を与えたのである。もつとも、その男が、本来の有閑階級に到達するには程遠いことも、やがて滞る予定の付けの支払いとともに隠しようもなくなる。有閑階級の趣味への到達とその維持は、どこまでも金がかかるようにできているのである。

有閑階級のなかに生まれ出た趣味は、それ以下の非有閑階級に順次滴下し、あるべき趣味についての規準なり感覚なりの大枠を決める傾向をもつた。それゆえ、有閑階級の趣味は、彼らの圧倒的な経済的諸力に普通の人々が到達しようとする際の、手っ取り早い努力目標のようにも思える。だが、有閑階級の趣味の金銭的規準は中々に高い位置にあつて、さらに上を志向して止まない。したがつて、普通の人々が新たに到達するであろう趣味の規準が、如何ほどか彼らに経済的地位を顕然と保障したり、見栄えはするが無駄な擬似的有閑生活の実現にどの程度まで貢献しうるかについては、甚だ心許ないのが実情である。そのような不安は、有閑階級が与える精神的

圧倒ないしは威圧と合成されて、彼らをして涙ぐましい努力を営々として続行させるかも知れない。しかし、その努力が実を結ぶ前に、果たしてどこまで淘汰的生活に耐えられるかについても、甚だ疑問なのである。社会の生産力の基盤を構成する彼らにとって、汲々とした日々の生活からの離脱なり離陸なりを望む方面に最大の努力が傾注されねばならず、このことは有閑階級の圧力に抗して生きるための前哨戦としては過酷に過ぎると思われるからである。

彼らが直面する生活の困窮は、当然の成り行きとして、生活の目線を自分自身の差し迫った苦しい情況に向けるを得ないように強いる。これに呼応して彼らは、有閑階級生活に対して無感覚——押し頂くべき遙か遠い存在という感覚——にもなるが、自分と同等程度の経済生活の範囲に留まる人間ないしはそこから這い上がるようにとする人間に対しては、同じように無感覚ではいられない。上に向かうべき精神的揚力が、その捌け口を見つけて淘汰的圧力として彼らを競争状態に抛り込むかも知れないからである。それゆえ、共同体的精神を分解する圧力が、このような経済生活の競争状態から芽生えもするが、またそれは無視できない勢力にまで成長する力強ささえ秘めていることだろう。有閑階級制度における淘汰的生活の副産物は、その影響を被るいずれの者にとつても、物心ともに居心地の悪い生活条件のなかに押し込む圧力をもつと言わねばならない。

非有閑階級の成員にとつて、有閑階級の趣味それ自体は、下から見上げる対象とならざるを得ない。この局面においては、これらの階級間に作用するであろう上下の比較の感覚という精神的諸力は一種の斥力とも言うべきものであるが、有閑階級の存在自体から受ける重力こそ実質ある引力となりうるであろう。したがって、より上

位の金銭的階級に含まれる者の趣味こそが求められ到達されて然るべきもの、また恥ずかしくない確固とした指標としてあるもの、との感覚に囚われるのも無理からぬところである。事の道理からして、より下層の者が有閑階級の趣味に到達しようとする努力は、社会における自分の地位が、少なくとも最下層ではないこと、あるいは経済的に人後に落ちることは決してあり得ないこと、あやうくば今はともあれ先祖の血統の由緒正しきことなどを、さり気なくも明々白々に表明することなどと考量されよう。したがって、有閑階級の金のかかった趣味に理解を示すこと、あるいはそれ以外の趣味に辛辣な批評を加えたり拒否する傾向が、経済的成功を目指す者の弛まぬ努力の諸項目から除外されることは滅多にない。金銭的審美眼が社会を生き抜くための重要な項目となり、そのなかから特定の美的な感覚が累積して質的に研ぎ澄まされる。この意味で、有閑階級の趣味は、純粹であつたはずの美的感覚を麻痺させる方向に作用する傾きをもってしまう。

ここで得られた美的な感覚とその効果についての推論は、多少の留保を伴いつつも、文化を構成する諸要素全般に渡つて適用できる程度の普遍性をもっている。たとえば、事の善し悪しを判断するに際して、普通の人々の素朴な感覚のなかにさえ金銭的規準が入り込む余地がある、ということである。極めて多額の金銭を緻密な共同謀議による詐欺によつて得た者と、困窮から生じた犯意をささやかな生活必需品の微少な窃盜に向けた者とを判ずるに際して、量刑の多寡が彼ら二人を分離する程度以上に、我々の素朴な感覚のなかでは彼らは質的に異なる存在である。

このような事例においては、軽微な犯罪者に対してはそれ相当の範囲を超えた侮蔑の眼差しが向けられもしようし、ほとんどまったく無視されることすらある。だがもし、その犯罪者に対して物分かりのよい態度や憐憫の

情を示す者があるならば、その者は訓練された正義の感覚に不足がない者、稀なほど人格高潔なる人物、はたまた経済的出自がその犯罪者からさして遠くない平面にある者、などと要らぬ世話を焼かれたりすることにもなる。これとは逆に、多額の金銭的奪取に成功を収めた者に対して差し向ける我々の眼差しは好奇に満ちているはずであり、その奪取に際して發揮された知的訓練や技量の高さ、勇敢さと武勇の見事さによって、罪の感覚が軽減されたり和らげられた挙げ句、時として彼らは英雄視されることも全くあり得ぬわけではない。これを証立立てる事例として稀代の盜賊ないしは義賊をあげることで足りないなら、極めて高度な手工業職人として技量を發揮したスカンジナビア半島の農民・漁民たるヴァイキングの往時の活躍を、これに代えても理論上は破綻しないであろう。

もとより、種々の犯罪がもたらすこうした精神的効果の差異は、その事柄自体には、喧しく論じられるべき内容に含まれていないかも知れない。したがって、この際はむしろ、かかる差異をもたらす何某かの諸力に思慮分別を巡らすべきであつて、これは議論の行程から道理に適っており、したがってそれが徒勞に終わる可能性も少なからう。ともあれ実際のところ、その差異をもたらす諸力のなかに、野蛮文化の残滓が付着しているものと思われる。その残滓といえども、素朴な人間に対しては、注目なり賞賛なりの感覚を呼び起こすに十分な「掠奪的な思考習慣」や「身分の上下の比較」という思考習慣を喚起するであろうし、それは未だに効力を發揮しうる程度で普通の人々の胸奥に存在しているかも知れない。このことには、それ相応の注意が喚起されねばならないだろう。何となれば、先述したように、卑劣極まりない掠奪行為によって獲得された金銭でさえも、その多寡が、事の善し悪しの判断に影響を与えるかも知れないからである。なおまた、受容された道徳原理に金銭の多寡が働

きかける可能性は、見逃し得ない程度に成長するかも知れないからである。(7) この限りで、道徳原理は、美的な感覚と同様に麻痺する可能性が皆無ではないのである。その完全な崩壊まで見届けるには時日が少々足りないかも知れないものの、金銭的な刺激のもとではそれが緩やかに進行していったり、掠奪的な思考習慣と平和的な道徳原理が均衡点を見いだすことなどあり得ないことも、牢記しておかねばならない予測事項である。

いままで述べてきたように、浪費とその習慣は、有閑階級の金のかかった趣味に体现するだけでなく、その累積的發展過程を通じて、社会の文化的構造の全範囲に渡って浸潤してゆく可能性がある。有閑階級は、物質的欠乏という深刻な圧力の届きそうもない名誉ある高い社会的地位にあつて、より高きを望む。彼らの生活は我々のそれと同様に、それぞれ程度の懸隔はあるものの、淘汰的な圧力を受けるからである。

その圧力を最も良く跳ね返した最高の有閑階級は、社会の生産力の限界内でそれ相応の程度で、物質的な生活水準と精神的な生活習慣の性質を決めるであろう。これは、兎にも角にも、文化の一つの到達点である。それゆえ、次位から以下の有閑階級生活に働く淘汰的な圧力が、その到達点に追いつこうとする涙ぐましい努力のなかに見て取れる。それは模倣というべき性質をもっており、また模倣それ自身に儀典的妥当性 (ceremonial adequacy) が生じてもくる。かくして、有閑階級への到達努力は、それ自身、もはや改まって細論する必要などないほどの経済的価値をもったということになる。したがって、程なく非有閑階級の側でも、無意識のうちにも模倣の努力が強いられることになるろう。

こうして、見苦しくない生活についての感覚が、我々の生活のなかの淘汰的な圧力と混交し、それらが折り合

いをつけた地点に生活水準の下限がそれとなく設定され、挙げ句の果てに確固としたものになる。それは、有閑階級制度の残存の程度、産業の進展の度合い、政治的な安定度、将来への展望の確実性の度合い、民主主義の実現の度合い、および普通の人々の気質や忍耐力などの総体によって、まずは定まるであろう。この生活水準の下限は、生活が物理的に立ちゆくか否かの平面を指し示すのではなく、体面を保つか傷つけるかの平面を映し出すのである。したがって、下限についての感覚は広く認められるところであるし、それは実に神経質な問題であつて、人と張り合うことを知らない純朴な感覚の持ち主のなかにさえ、驚くほど立派に成長しているのである。

もとより、体面の問題は重要であつて、これはまた有閑階級の思考習慣の逐次的発展と切り離して論議することができない。右に述べたように、有閑階級の思考習慣は淘汰的圧力を跳ね除けようとする意識的努力のなかに現れるが、それはまた公認の趣味の金銭的規準を模倣するよう働きかける。新奇な趣味を求める欲求は、急を要する金銭的事情から解放された最高位の有閑階級やその周囲にこそ見出せるとしても、かかる動機が普通の人々の間に同様の確度で急速に広まるとは、まずもって考えにくい。普通の人々がもつ印象では、社会の生産力の状態の如何によつては、差別化の欲求の動機が同調性の欲求に打ち勝てないものと見られるからである。そこで、見苦しくない体面の水準は、模倣の習慣すなわち有閑階級の趣味への同調の習慣が、目に見える程度に定着しているか否かの平面に決することとなる。別言すれば、新奇な趣味が生まれ出る可能性を最も削がれた人々の経済的立脚地点まで、有閑階級の制度的圧力のもとに模倣が強いられるということである。それゆえ、有閑階級の風変わりな趣味といえども、それ相当の経済的地位にいる者にとつて、これが模倣の対象項目から完全に消え失せることはない。生活水準の最下限にいる者にとつても、事情はそれと反対方向に向かつて走り出すことは

なからう。新奇な芸術運動は、それ相当の金銭的階級のなかに生まれ、そのなかにまず拡散し、やがては広く市民権を得た後に停止状態を迎えるであろうが、その際、首尾よくいけば權威ある伝統的地位を獲得するという筋道を辿るものと思われる。

結局のところ、一定の文化の状態は、有閑階級が強い模倣の作用によって社会のなかに形成される。事の成り行きからして、有閑階級制度のもとに形成されつつある文化は、稀な例外を除いて、社会に変化をもたらす動因すなわち革新的動因として順調に成長してゆくことはないであろう。有閑階級に固有の文化は保守的な傾向を色濃く社会にもたらす傾きをもつのであって、また模倣すべき方向の反対側に向かう批判的あるいは革新的努力は有閑階級から下方へ遠ざかることをあからさまに示すからである。それゆえ、この種の下降は不名誉なこととして毛嫌いされ、一種の本能的な嫌忌の念にまで成長するかも知れないからである。したがって、この場合に有閑階級の姿勢として許される範囲は、革新的勢力に物分かりの良さを表向き態度として取ることまでである。それを超えて彼らが革新的勢力と取り結ぶことは、もしこう述べるのが許されるならば、有閑階級制度のもとでは好ましくないばかりか危険な事柄に属することになるのである。

したがって、革新的勢力は、経済的成功なり見事な誇る精神に親近感を感じないばかりか、反発もし、事の成り行き次第では敵視することにもなる。この敵視の感覚が適当な捌け口を見出すことなく社会の不安定要素の拡大に資するほど十分に成長するまでは、有閑階級の側から歩み寄ってくることはまずない。たとえあつたとしても、その歩み寄り、美辞麗句によつて彼らの隠された魂胆を悟られない類のものから開始され、安定的な均衡点を見つけたならば即座に停止する。それは、さして優秀とは思えぬ役人たちが彼らの既得権を死守し

ようと人を煙に巻くような小賢しい話ぶりの向こうに、旧態依然とした帰結を目論むあの腹黒さに似ていることだろう。若干の名誉と身分保障のなかに安穩と暮らす勢力も、有閑階級を支える有力な制度的要件となりうるのである。この有閑階級の安定的勢力は、小核を交換して有性生殖する草履虫に似ている。このような指摘は、義憤に駆られ彼らを貶めるために言っているのではない。また、草履虫の単細胞生物としての性質を、彼らの人間的な説明に充てようなどという試論の類にも入らない。そうではなくて、草履虫は世代交代をする最初の生物として今日まで生き長らえてきたように、かかる安定勢力の構成員たちも世代交代をしながら彼らの経済的地位を上手に守り続けるのではなからうか、と私は言いたいだけなのである。

ここまでの論議のなかで、有閑階級は社会に保守的な制度的沈殿物を撒き散らしてきたことが明らかとなった。それゆえ、有閑階級は、保守的で手の込んだ儀式的な行動習慣を社会全体に根付かせ、反復させることよって無意識のうちにその拡大路線に乗るよう、力を発揮することとなったのである。また、それは順次、彼らに特有の思考習慣を生じさせもする。有閑階級は自らその名誉を誇示すべく、肉体労働からの顯著な禁絶および金銭の多大な浪費という思考習慣を累積的に成長させ、それらをもって遵守されるべき社会の一定の規範として制度化するのである。顕示的閑暇 (conspicuous leisure)、代行的閑暇 (vicarious leisure)、顕示的消費 (conspicuous consumption) および代行的消費 (vicarious consumption) という思考習慣の累積的發展を通して、結局のところ有閑階級は、社会全体に保守的で浪費的傾向をもたらすこととなる。

かかる浪費は、日常生活を取り巻く物質的外枠に働きかけるばかりではない。その作用は、善良と思われる普通の人々の内面への拡散と浸潤とを通じて決定的影響を与え続け、精神的規定性となるであろう。それゆえ彼ら

は、たとえば戦争とその帰結が、如何なるものかについての想像力の及ぶであろう範囲のなかから、それが生命および財産等一切の甚大な浪費であるという觀念を前以て払拭されかねないほど強力な制度的圧力に、無感覺のうちに晒されることとなる。かくして、彼ら普通の人々が少なくとも到達すべき体面や、平和的精神の後退なしは好戦的精神の前進は、有閑階級の圧力によって、その喫水線が定められるであろう。

有閑階級の制度は、経済的事柄の範囲のなかにだけその影響をもたらすものではない。それは、学問やその他の文化を構成する諸要素に関しても、無視し得ないほどの影響力を発揮する。すなわち、学問の在り方を保守的にするのも彼らである。ここでとりわけ問題とすべきことは、有閑階級が愛好する学問は因果的な見地からではなく世評の観点から研究される古典に属するから、因果的見地からなされるところの、科学と技術の進歩に寄与する学問研究の発達に有閑階級によって阻害される可能性が生ずる、ということである。もとより、古典的学問の研究は実用的な学問の研究と同時に、釣り合いを保ちながら幅広く推進されねばならない。⁶⁾

とはいえ、注意を喚起すべき事柄もまたある。古典的学問はその体系の理解が容易ではないし極めて困難でさえあろうから、その習得には長きに渡る時間の非生産的消費を一般に伴うであろう。事実がこのようであるならば、古典的学問の習得者は、人間的諸力の構成因子を新たに追加したということになる。この追加された因子は、大層強力な経済的諸力そのものである。それは、古典的学問を身に付けた本人に対し、往々にして優越的感覚を喚起させるし、また人間的格差を無意識のうちに線引きさせもする。さらに、その線を飛び越えた優越的方面に広がる可能性に満ちた人間生活の新局面を、彼の手中に握らせるかも知れない。かくして、有閑階級生活の

末端に彼が軸足を移そうと希望すれば、それが無理な相談ではなくなるであろうし、さらに垣下の座まで運ばれもしよう。そうこうして高い生活領域に達することは、見苦しくない経済的水準なり平面に自らが置かれたことを、古典的教養を光背としつつ優雅に証拠立てる。よって、そこに一定の経済的波及効果が発生する。つまり、豊かな古典的教養の蓄積は、有閑階級の構成員証書としての効力をもつにいたるのである。その限りにおいて古典的学問の追究は、厳しい眼で見るとすれば、自らの優越的感覚を満足させる以外には益するところが無いということである。だがしかし、学会や所属機関での名誉ある地位なり、学問の世界での名声のための名声なり、はたまた法外とも思われる金銭的欲求なりといった、真摯な学問研究の外縁に渦巻く疑惑を自覚的に排除しながら古典的学問の高所に到達し得た知友を、私は身近にもっている。もって頂門の一針となすべきである。

ともあれ、有閑階級によって習得された古典的学問が放つ光輝は、一定の経済的効果をもって社会の底辺まで浸潤することにもなろう。その本質において、大学に籍を置く者は固有な意味での有閑階級ではない。しかし、疑うことを知らない純朴な者ほど、その光輝に絶えず引きつけられることが珍しくないのも事実である。少なくとも彼らの感覚のなかでは、学問が放つ光輝さえ閉じ込められる知的ブラックホールに自ら進んで身を置きながらも重々しい学問の殿堂がもたらす栄誉を永々として保全管財するだけの大学教員をしてさえ、副次的な有閑階級としての地位に祭り上げられる。むしろ、普通の人の感覚とは、およそそのようなものなのであろう。確かに、抜け目のない学者が織り成す人間的な接触と行動の範囲は、溝板を跨ぎゆくような方面には求められないし、より増しな他の有閑階級に接近することが屢々である。彼の生活の目線は常に上を向いている、ということである。

このように見ることが許される限りにおいて、次のような指摘ができよう。もとより有能であることが疑うべ

くもない学者研究者ならばさらに増して、政治の世界に踏み込むのはさほど困難な話ではないのであって、むしろ歩幅一步も要せずそこに辿り着くこともありうる、と想定されるのである。また、事の流れからして、政治、軍事、宗教およびスポーツといった固有な意味での有閑階級のうちのいずれかから、副次的な種々の有閑階級に転ずることは、半歩も必要ではないかも知れない。それは置かれた経済的地位の上下の差別の点からして、あたかも重力の法則であるかのように、一定の諸力の落下という性質をもっているからである。そうした階級なり職業上の移動には正当とは言えない遣り口での経済的利害の調整が確固として取り結ばれていることが稀ではなく、いわゆる談合と天下りの排除に、多大な社会的コストを要するまでに至るほどである。

なお、有閑階級の保守的学問⁽⁹⁾に対する偏愛は、大学のカリキュラムとその編成にも影響を与えずにはおかない。多様で柔軟な文化的構造のうえに、より平和で安定的かつ持続可能な社会を自由な創意のもとに建設しようとするならば、その任に耐えうる大学が運営され、またそれに相応しいカリキュラムが適宜に用意され果断に更新されなければならない。伝統に凝り固まった硬直的で保守的な大学は、社会をその求められるべき変化から取り残すだけでなく、取り返しのつかない知的惨状を現出させるであろう。向後の大学は、次代の有閑階級の権威ある養成機関、あるいは副次的な有閑階級の再生産機構を目指すべきではない。保守的な旧来の大学像は有閑階級制度の破片とともに些か残りうるであろうけれども、求められるべきは、社会改革の担い手となりうる人材、専門的な職業の任に耐えうる人材、深い教養を積んだ平和的で知的に優れた人材を、継起的に社会に送り出す能力を備えた高等教育機関である。正に、ヴェブレンが言う「技術者」を社会に送り出すことが、大学として肝要なのである。このような観点に立つならば、リベラルアーツ (liberal arts) の重視と伸張は、誠に理に適った

ことと言わねばならない。

ヴェブレンは有閑階級の諸制度を、その発生と成長および累積的変化の過程において批判的に研究したのであった。見てきたように、それは経済学的研究とは言うものの、実は極めて広範な学問分野から得られた知識を総合してなされている。このような意味において、彼の研究は比較文化論的研究の枠組みさえ含んでいるかに見えるが、ともかくも社会の多様な文化についての史的考察という趣は、これを確かに有している。よって、こうした研究成果が一書として著された『有閑階級の理論』には、高い評価が与えられてもきた。実際、ヴェブレンは、経済学はもとより歴史学、先史学、文化人類学、人種学、社会学、生物学、哲学、心理学、宗教学および教育学などの多岐に渡る学問領域の研究成果を自家菜籠中のものとして統合し、有閑階級制度の進化論的研究に進したのである。その際にヴェブレンは、基本的にチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の所論に依拠⁽¹⁰⁾しながら、客観的な事実を重視し機械的な因果の連鎖によって、諸制度の発展・進化を虚心坦懐に研究したのであった。

かくして、『有閑階級の理論』の出版がヴェブレンを直ぐさま学界の第一線に押し出した。この経緯は、この書物の重要かつ画期的な意義と価値とが評される際に、まず引き合いに出されることが珍しくない。なお、ヴェブレンの思想は難解であることもまた夙に知られており、左右両陣営からの攻撃に同時に晒されることすらあった。この混乱振りは、彼の著『帝政ドイツと産業革命』(*Imperial Germany and the Industrial Revolution*, 1915) の公刊後に鮮明な形で見られた。⁽¹¹⁾そしてさらに、かつてスタンレー・M・ドーガード (Stanley Matthews Dauger) がヴェブレンの理論に関する論議では「意見の不一致は例外ではなくて、むしろ原則である」⁽¹²⁾と指

摘してから半世紀以上を経た現在でも、かつての混乱やこの原則には然したる変化がない。それゆえにこそ、ヴェブレンの主要著作のなかでも、その著『有閑階級の理論』に立ち戻って真摯に彼の肉声に問い掛けねばならないし、就中、その制度の概念や、歴史の舞台としての発展段階説そのものを検討することが緊要である。

第四章 ヴェブレンの制度の概念とその発展段階説

「制度は、本質的に、個人と社会との特定の関係および特定の機能に関する支配的な思考習慣である。」⁽¹³⁾
(The institutions are, in substance, prevalent habits of thought with respect to particular relations and particular functions of the individual and of the community.)

ソースタイン・ヴェブレンはその著『有閑階級の理論』のなかで制度の概念を右のように規定したが、この文意の深奥を正確に理解するためのキーワードは、恐らくは「個人」と「社会」という語であろう。

まず、ヴェブレンのここでの「個人」という語が、「習慣」(habit)の概念として受けとめられるべく用いられたと推定できるとすると、それはウィリアム・ジェームズ (William James) からの思想的影響と見て取ることができよう。プラグマティズム (Pragmatism) の思想はジェームズからヴェブレンへと流れ込んでおり、「アメリカにおける心理学の独立宣言」と評されるその古典的名著『心理学原理』(The Principles of Psychology, 1890) は、ヴェブレンの制度の概念やその基本思想の検討にも、まずもって欠くことができないであろう。ジェームズにとって「人間は習慣の束」であり「習慣は意志」であったが、ヴェブレンにとっても人間は諸本能と習慣をそ

の内面に懐胎する能動的な活動の主体であると考えられてもいる。

次いで、またもし、その「社会」という語が、「習慣」に對置するものとしての「習慣」(custom)の意味合いを包摂ないしは内接するように暗示的に使用されたと見ることが誤断でないとすると、ヴェブレンとジョン・デューイ(John Dewey)との思想的紐帯をその語脈から感得することが不可能ではない。個人的なものである「習慣」とは異なつて、「習慣」は社会的なものであり、文化の根本的部分を構成する。その文化の在り方は、自由とは何かを考える際に一定の枠組みを与える。このような見地に立つデューイは、そのリベラリズム(Liberalism)の思想をヴェブレンの基本姿勢に接合させる立場にいたと言える。彼ら二人は、ともに一時期、シカゴ大学で過ごしていたのである。

ともあれ、ヴェブレンは「個人」と「社会」の諸概念、あるいはもし言い換え可能であるとするならば「習慣」と「習慣」の諸概念を、より高い統一的な見地から総合したものと見られる。また、ここでの「個人」と「社会」は、「無意識的」と「意識的」との区別にも照応すると見られることもできよう。もとより、習慣は無意識的であり、習慣は意識的だからである。いずれにしても、いわば、対立する要素の統一物が制度として措定されたと見られる。したがって、制度は矛盾したものであり、それゆえまた変化の動因¹⁴である。この制度は思考習慣であり、また文化を意味するから、ヴェブレンの経済学は、取りも直さず文化を主要な研究対象とする学問ということになる。とりわけ、社会に存在する広範な文化過程の累積的变化を、ヴェブレンはその心血を注いだ学問たる経済学の中心論題に据えている。それゆえヴェブレンは、その経済学の論議において文化段階とその相違に留意しており、また実際に彼の発展段階説は、文化段階の累積的發展として捉えられ、その全体が構成されて

いる。

そこで次に私は、いよいよヴェブレンの發展段階説を取り上げることしよう。彼の發展段階説は、『有閑階級の理論』と『製作本能論』(*The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts, 1914*)に「それとわかる程度には述べられてはいる。けれども、その他の彼の諸著作⁽¹⁵⁾の特定部分には、これが一括して述べられているわけではない。むしろそれは、議論の行程の合間に断片的に現れるものの、いずれも他の主たる論題の支えとして些か不明瞭に描出されているので、それら特定の論述箇所から彼のかかる学説の輪郭を掴んだり、ましてやその全体を描くことなど不可能に近い。ヴェブレンの發展段階説を謬見を排して明瞭にまとめることは、その思想の全体像を有機的に丹念に辿ることなしには、かなりの困難を伴うのである。それゆえ私は、多少なりともヴェブレンの諸著作に目配りしながら、やはり『有閑階級の理論』を中心にしつつ限定的な範囲でヴェブレンの發展段階説に接近することとした。そこで順次私は、歴史の發展を画する四つの諸段階とその序列とを示した後、私見を交えて若干の解説を添えることとした。

- (一) 平和的な原始的未開文化 (primitive savage culture) の段階
- (二) 初期の野蛮時代 (barbarian age) である掠奪文化 (predatory culture) の段階
- (三) 野蛮文化の比較的高い段階である半平和的文化 (quasi-peaceable culture) の段階
- (四) 現代の平和的な金銭文化 (pecuniary culture) の段階

見られるように、ヴェブレンの発展段階説は文化のひとつとまりの状態をもって緩やかに区別がなされ、その序列が編成されている。もし、これらの諸段階を一般的な時代区分に照応させるとすると、それは次のようになりそう。

- (一) 原始共同体時代 (age of the primitive community)
- (二) 奴隸制時代 (age of the slavery)
- (三) 封建時代 (age of feudalism)
- (四) 資本主義時代 (age of capitalism)

ところで、文化は制度を意味すると同時に思考習慣と同義である。そこで、各段階を、思考習慣の態様によって規定しておかねばならない。

- 〈一〉 平和愛好的な思考習慣が共同体のほぼ全成員によって共有される段階
- 〈二〉 人間による人間の掠奪という思考習慣が支配的に定着する段階
- 〈三〉 差別的思考習慣が定着し、身分の上下を律する厳格な法体系が完成する段階
- 〈四〉 金銭的競争 (pecuniary emulation) が支配的な思考習慣となる段階

ヴェブレンは第一段階を「平和的」と形容するが、文化的進化の系列の始期においてさえ、競争なり闘争が皆無であったとは言えないであろう。このことは、もとよりヴェブレンが指摘した⁽¹⁶⁾ ことであつて、第一段階を字義通りの意味で「平和」と称するには、かなりの留保を要する。これを「平和的」と慎重に言い換えると、より一層、この段階の実相に近づくであろう。この事例における言葉遣いの選択は、ヴェブレンの視点に立つて、第一段階の実相にどれだけ迫れるかという問題なのである。

この第一段階での競争は、「人間の自然に対する競争」すなわち生存競争の範囲から出ないであろうし、この競争から脱落しないように共同体の成員は相互に協力しなければならぬ。したがつて、闘争は、たとえそれが散発的あるいは偶発的に生じたとしても、恒常的にその文化段階を特色づけるまでには成長することができないであろう。習慣的な好戦的心理状態は、未だ制度となり得ていないのである。それゆえヴェブレンは、第一段階を「平和」ではなく「平和的」と形容したとみられる。この「平和的」な文化段階の次に、有閑階級制度が現れてくるのである。

もっとも、先史時代ないしは未開の時代の戦争——利害の対立の解消を企図した、武器の使用と防御とを伴つた集団的殺戮行為——の存否に光を当てた現今の内外の諸研究⁽¹⁷⁾の進展を見るならば、ヴェブレンのいう第一段階は、その「平和的」性質とともに掠奪的性質さえ含むであろうことが窺い知れる。新進気鋭の人類学者として名高いヘレン・E・フィッシャー (Helen E. Fisher) は、「共食いをした古代のホモ・エレクトゥス (*Homo erectus*) は、人間の人間に対する残酷さの最初の証拠を残したと言える⁽¹⁸⁾」とさえ指摘している。だがしかし、如何ほどか、掠奪的性質が第一段階において公認の精神的態度となつたかについては不明である。

第一段階から第二段階への過渡期は、そのなだらかな始まりを遙か昔に見出すことができる。それは悠遠として続いたのであった。その長い一定期間は、原始的未開文化の段階に定着していた平和的な思考習慣が、人間の生活体系の奥深い部分に保存され子々孫々に受け継がれながら、やがて生まれ出る掠奪の制度の深層に押し込まれてゆく変化の時期でもあったであろう。同時に、集団なり共同体なりの生産力が上昇し、その一般的な富の水準が極めて遅々としながらも上昇した時期であった。このことは平和的な原始的未開文化という制度を切り崩しにかかる物質的諸力の刺激として作用し、「力の強い能力ある男性による女性の捕虜としての捕獲」という内実をもつ掠奪結婚の慣行として現れた。そして、戦利品として獲得された女性は人類最初の動産となった。こうして、所有権についての臆気な感覚が発生した。この感覚は女性の労働の所産にも作用するから、女性の労働の所産——物的なもの——は男性に帰属することとなった。こうして、所有の観念は女性を対象として芽生え、物的なものに拡大することを通じてその観念が逐次成長してきた。⁽¹⁹⁾ やがてそれは、確固とした所有権制度に成長する。⁽²⁰⁾ この制度は、有閑階級の発生と軌を一にしている。というのは、それらは同じ経済的諸力を構成するからである。

第一段階とそれに引き続く過渡期が過ぎ去った後、初期の野蛮時代に本格的に突入する。これは、第二段階の掠奪文化の段階である。ヴェブレンにとって、原始的未開文化の段階と掠奪文化の段階が劃される目印は、掠奪的な思考習慣が公認の精神的態度になったか否かである。生産力の発達という物質的環境の変化とその圧力に留意しつつも、ヴェブレンはやはり思考習慣とその累積的变化に着目するのである。⁽²¹⁾ ヴェブレンがいう掠奪的段階は、もはや「平和」でもなければ「平和的」でもない。というのは、掠奪文化の段階は、掠奪的な態度がそ

の集団の成員の習慣的で公認の精神的態度となつた時に初めて達成される段階だからである。その野蛮文化に満ちている特徴は、搾取、強制、強奪といった要素である。とりわけ、野蛮文化の初期の段階においては、強制と強奪という習慣が支配しており、やがてそれは慣習による体系的で堅牢な、守らねばならない要素へと変わつていった。生活習慣が温和なものから掠奪的なものに移行していったのである。ヴェブレンは、このようにも述べている。

「精神的態度の変化は、その集団生活の物質的事実の変化から生ずるものであり、したがつてその変化は、掠奪的態度に好都合な物質的環境が有力となるにしたがつてだんだんとあらわれてくる。掠奪文化の最低限は生産の限界である。掠奪は、生産の方法が一定の効率の程度にまで發展し、その結果として、生活資料の獲得に従事するものの生計の維持以上に、戦闘をおこなうだけの余裕が生ずるまでは、ある集団、もしくはある階級の習慣的・因習的な生活方法となることはできない。それゆえに、平和から掠奪への推転は、技術的知識の成長と、道具の使用とに依存する。掠奪的文化はこれと同じように、人間をおそるべき動物たらしめる点まで武器が發達するまでは、初期の時代には実際的とならない。初期の時代での道具や武器の發達は、もちろん、二つの別々の見方から見た同じ事実である。」⁽²²⁾

歴史上、有閑階級制度が最も發達したのは封建時代のヨーロッパや封建時代の日本のような、野蛮文化の比較的高い段階 (the higher stages of the barbarian culture) の場合である。すなわち、第三段階の半平和的文化の段階においてであり、我が国では江戸時代がこの段階に照応する。江戸時代においては、戦国時代に見られたような掠奪的な思考習慣ないしは尚武の精神は相対的には後退し、身分を律する法体系による人間の自由の限定ある

いは対外的な経済活動の自由の制限が、制度すなわち思考習慣として定着していたのであった。したがって、第三段階は半平和的な身分の段階⁽²³⁾と称呼することができ、これはいわゆる封建時代そのものである。

第四段階への突入とともに、封建的な身分制度は解体に向かって急転するが、その解体に向かわせ拍車をかけた諸力が、かかる制度を跡形もなく粉碎することは滅多にない。我々は現今においてさえ、身分制度の深刻な残骸に出くわす日常生活の局面を知っている。また、忌み嫌われるこうした経験の反復に加えて、所有権制度の出自が掠奪結婚に求められるわけでもあるから、身分についての自由な感覚の成長が、雲散霧消したはずの制度的枠組みを超えることはなかなか難しいのである。

ともあれ、所有権制度は法律によって遵守されることとなった。こうして確定した所有権制度は、それと表裏一体の自由競争制度とともに、現下の資本主義社会を下支えしている。この社会においては、金銭的競争が全面的に現れる。もとより、江戸時代においても複雑な税制を含む貨幣経済の発達や先進的な金融などの経済活動が見られ、それゆえ資本主義社会の萌芽をこの時代に求めることもできるほどである。産業革命を未だ経験していないこの時代であっても、決して停滞の時代ではなかった。江戸時代においては、勤勉革命 (industrious revolution) が成し遂げられていたとさえ言われている。⁽²⁴⁾

第四段階すなわち現代の資本主義時代においては、金銭は社会的実力の証拠物件となる。それゆえ、金銭的競争 (pecuniary emulation) が激化するのである。ヴェブレンによれば、金銭的競争とは、「金銭の獲得において他人を上回ろうとする名譽のための競争」である。これは、第一段階に見られたであろう生存競争と好一對をなしている。⁽²⁵⁾ 但し、金銭的競争は、生存競争がそうであったような人間対自然の間で行われるものではなく、

人間対人間の終局の見えない競争である。生存競争は、共同体の成員の生死に関わる大事である。だが、その生命の危機が遠ざけられ安全が確保されるにつれ、彼らの競争状態は当面の間収束に向かい、その停止状態が維持されよう。しかし、金銭的競争は、その望むべき成功の指標に安定的な到達点はない。到達点は直ぐさま出発点に転化するのであって、そこからの撤退は、たとえ軽微なものであっても、当事者にとっては深刻な事態であると解される。深刻なという意味は、恥ずかしくない生活水準からの撤退がもたらす体面の問題、すなわち撤退したその時に彼らが受け止めざるを得ないであろう精神的状態の著しい低下ないしは毀損を指している。

金銭的競争は固有な意味での有閑階級の専売特許ではなく、その水準に達していない大多数の人々にとっても、多かれ少なかれ、そのなかに抛り込まれる資本主義経済社会に特徴的な慣行であることを、我々は忘れてはならない。彼らは確固とした人間であり唯一無二の存在なのであって、決して有閑階級の副次的産物ではない。そのような彼らであるからこそ、金銭的競争への参加を無反省に続けたならば、それは有閑階級への信任投票とならざるを得ないであろう。金銭的競争への彼らの狂奔は、掠奪文化の時代の思考習慣への隔世復帰であって、愚かな振る舞いと誇りを免れないであろう。それは、散々撒き散らかされた有閑階級の思考習慣の断片を拾い集めることであって、副次的な地位に押し留められたその経済的諸力が浪費に費やされることでもあり、さらにまた平和で安定的かつ持続可能な経済社会に到達するための文化の状態を生み出す真摯な努力ではないからである。

平成一七年九月三〇日

(1) 本稿において私が、制度主義と言う場合、ソースタイン・ヴェブレンをその創始者とし、彼の思想の流れを汲むアメリカで生まれた知的運動を指す。この運動が既にアメリカ本国に留まるものでなくなつて久しいことは、私自身のような者でさえ制度主義の知的伝統の片隅にあることから窺い知れよう。そのような者の眼から見て、多岐亡羊の感さえある今日の制度主義の展開は、いづれにしても発展の筋道を歩いているものと期待できるかも知れない。

ともあれ、私が常々考えていることは、次の通りである。一般的に言つて、制度主義の立場に立たんとする者は、少なくとも次の三つの要件を満たしたうえで個々の研究に着手すべきであり、また一定の言説を披瀝せねばならない、ということである。それはまず第一に、制度の概念をもっていること。第二に、現実的な人間性の概念をもっていること。そして第三に、累積的因果関係の原理に依拠していることである。これらの要件は、たいへん緩やかにではあるが、制度主義とは何たるかについての包括的な概念を示している。人は、およそ制度主義が如何なるものかについて臆気な論議を開始する際につけ、ここにあげた要件を等閑視したり無視するには、それ相当の勇氣が必要とならう。これらの要件を具備しない「制度主義」が声価を得ているとしても、それらは私が依拠する制度主義を毫も意味しないし、またその代用品にすらなり得ない。ダーウインの進化論の大伽藍が放つ威光ないしは喧伝されるべき最新の進化化学研究の成果という反射光に、卓然として流麗かつ伝統的な経済学的手法を接合しただけの「制度主義」と、私が標榜する制度主義は折り合いがつかないものと思われる。このように述べたからといって、僭越にも事の善し悪しを云々したり、批判なり排撃なりに耐えるべく予防線を張ったり、ましてや正統性を誇ったりなどい

う企ては、これを私は微塵も持ち合わせていない。取り立てて注目されることは決してないであろう、自分自身の思想的立場を鮮明にすべく長舌を振るっただけの話である。

- (2) ソースタイン・ヴェブレンの生涯を詳細に辿りながら、その思想背景を丹念に描写した研究として、ジョゼフ・ドーフマン (Joseph Dorfman) の『ソースタイン・ヴェブレンと彼のアメリカ』 (*Thorstein Veblen and his America*) をあげておかねばならない。この著作は、事実関係その他に多少の留意を払って繊くならば、ヴェブレン研究に着手する際の典拠としての地位を未だに失うものではない。—— Joseph Dorfman, *Thorstein Veblen and his America* (New York: The Viking Press, 1934). なお、本稿第二章の「ヴェブレンの略歴」をまとめるにあたり、私は次の書物に多くを負った。ここに記して、謝意を表する次第である。——松尾博著『ヴェブレンの人と思想』ミネルヴァ書房、昭和四十一年刊。

- (3) 学生諸君が本稿を読み進めてゆくうちに難解に感じる箇所は、私自身の認識の範囲と内容が極めて限定的なまま書き進めたためか、取りあげられた事象があまりにも複雑なのでそれに筆致が及ばないためか、あるいはそれら二つの要因を体裁よく繕ったり上手な言い回しができない程度の稚拙な文章表現能力のためであろう。いずれにしても、諸君の読解能力に期待したいところである。なお、本稿は、PDFファイルで閲覧に供する予定であるから、適宜にこれを印刷し講義時には携えるよう併せてお願いしたい。

- (4) ソースタイン・ヴェブレンの社会学者としての側面を強調する向きもあるが、彼は正しく経済学者である。その著『營利企業の理論』 (*The Theory of Business Enterprise*, 1904) は、ヴェブレンに対するこの評価が正当なものであることを教えてくれるであろう。なお、一般に見逃されている点を私見によって補い

るとすれば、それは、ヴェブレンは二〇世紀初頭における第一級の国際政治学者として位置づけられる面がある、ということである。次の二つの書物を熟読玩味すれば、些かの躊躇も無く、そのように言い切ることもできぬ。——『帝政ドイツと産業革命』(Imperial Germany and the Industrial Revolution, 1915) および『平和の性質およびその永続条件についての研究』(An Inquiry into the Nature of Peace and the Terms of It's Perpetuation, 1817)。

(5) Joseph Dorfman, "Introduction," in *Imperial Germany and the Industrial Revolution* by Thorstein Veblen (New York: The Viking Press, 1939), p. xi.

(6) 一八九九年にその初版が出版された、ソースタイン・ヴェブレン著『有閑階級の理論』(The Theory of the Leisure Class) の副題として有名である。

(7) 被疑者ないしは被告人として勾留中であつた政治家、大企業の経営者および芸能人の全部ではなく恐らくは一部の者が、到底支払い不可能と思われるほどの多額に上る保釈保証金を予納して、身柄の拘束を一時的あるいは限定的に解かれる光景に接することが、昨今珍しくない。権利保釈における許可の除外事由がなかったのか、あるいはまた被告人の経歴や性格、社会的地位、家庭状況、職場環境などについての裁判所による総合的判断を経て裁量保釈の対象となり得たのか、その辺の事情に関して門外漢であり法的な手続きについて暗愚である私にはまったくもって判然としない。しかし、明瞭なことは、いわゆる「娑婆」に出た彼らに対してもつ純朴な人間の側の感覚は、ともかくも彼らには多額の保釈金が課されたこと、そしてさらにはその保釈金額を即刻に支払い得た能力があることの方に引きつけられる、ということである。

う。裁判中の身柄の自由を現金を担保に取得した彼らに対して、経済感覚の停止していない人々がもつ直感的評価も、およそこのようなものであろう。

- (8) ギリシヤ以来の哲人の言説に暗澹たる世界を照らす永遠の真理を見出し、マクベス (Macbeth) の最期に我が身の驕慢を省み、稀代の名指揮者のみによって紡ぎ出される深淵で生命力のある音楽から楽聖 (=Ludwig van Beethoven) の精神に触れるといったようなことを、最低限の生活水準から遠く離れた有閑階級の趣味の範囲のものだとしてこれを忌避することは、人間の精神生活にとつて生産的とはいえない。歴史の評価に耐えてきた哲学、その文学およびその音楽などの古典的知識と芸術の全体は、社会の普遍的な共有財産ともみられ、その意味で真理と芸術は誰にでも開かれている。哲学者の三木清の言葉を借りれば、「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む」のである。それゆえ、混迷した現代社会のなかにあつてこそ、その共有財産は追い求められるべき本性を発揮するのであろう。ここに共有財産という意味は、様々な分野への応用に対する基礎科学として新しい理論を生み出し、その成果が社会に還元されることも指している。この意味で、たとえば数学の学問体系は、調和のとれた古典的学問として、それと実学とを架橋していると言わねばならない。また、贅言するまでもなく、その数学と物理学のうえに機械工学が存立している。この学問は、社会の生産性の向上に、確かに直結している。

- (9) 国家統治の学問たる行政法は、正しく有閑階級の学問である。高い志と情熱とをもって長きに渡る刻苦勉励のうえにこれを修め、官僚の要職から転じた政界でも職責の重さに良く耐えて頭角を現し、かくして

社会全体の安寧を真摯に考え実践し得た者は、この限りでそれに見合った尊敬を一身に集める資格がある。政界から目を広げると、このような尊敬の高さへの到達なり接近が近々見られた事例は、知らない者は誰もいないほどの成功を収めたスポーツ選手においてだけであろう。けれども、たとえば、珍しくない作物の品種改良に成功した無垢な農民や、社会の一隅を照らす地道な仕事に長年邁進してきた者に、彼ら有閑階級が到達したのと同程度に高い尊敬が降り注がれる事例を見いだすことは、滅多にできるものではない。その地道で熱心な活動が、長い歴史の風雪に耐え人心の根底に決して途絶えることのなかった特定の宗教的勢力——有閑階級の構成員——と、普通の人々が達成した業績の誇るべき素朴さがもつ高貴な力が合成された時、どうにかこうにか彼らの行いは意識的無視から解き放たれ、称揚され、顕彰の対象にすらなりうる。かくして、ここまで辿り着いた彼らにして初めて、広く社会から尊敬を集めることになろう。彼らとはかくも、眼前の対象にその注意と努力とを振り向けたのであって、国家についての認識や尊敬の獲得がその対象に優越することはない。この点で、国家統治の学問たる行政法から出発して官界なり政界なりに躍り出た者は、国家とは何かについての鋭敏な感覚を功名心と表裏一体で確かにもっている。それは、我々の考えの及ばない高さにまで達するのが通例である。だがしかし、高いからと言って一切の不純物を含まないとは言えない。不純物の含有は、何も彼らだけの特権でないことは我が身を省みれば十分に事足りるからである。ともあれ、これから先のことは、やや例外的と言えるであろう事の成り行きを範囲を出るもの以外の何ものでもないと期待されるのであるが、それについて次のような少々杜撰な議論を披瀝しておくことができよう。

畢竟、国家統治の学問に向けられた当初の志と情熱は、その学問的性質に付着した有閑階級の思考習慣を通じて些か冷え込むであろうし妥協にさえ向かうものである、という指摘ができる。やがては特定の間関係と所属組織の在り方を通じて、本格的にかかる思考習慣に接することにもなる。かくして、天下国家を論ずる熱意や気力など最初から皆無であつたのだと痛くもない腹を探られることはないまでも、彼らに対する好意的評価はほぼ消え失せるに至る。清貧の思想が喋々されるからには、それと逆の経済的勢力が然るべき世界にも蔓延しているのであろう。したがってまた、政治家の汚職や官僚の腐敗などは、存外、このあたりにも根を持つているのかも知れない。こうして有閑階級の思考習慣が成長し果実を結ばねば、彼らが依つて立つた学問の性質に金銭的思考習慣 (pecuniary habits of thought) が生長しうる懸念が増大し、社会の退廃の再生産過程に拍車がかかる筋道が、瞭然として浮かび上がると言わねばならない。それゆえ、有閑階級の思考習慣の果実が社会という土壤に零れ落ちてなお、そこから栄養分をひたすら吸い上げて再び新芽を吹くことは断じてないであろう、と純朴な感覚のなかで期待されるのである。

(10) ソースタイン・ヴェブレンは、チャールズ・ダーウインの「進化論」思想の影響を濃密に受けている。けれども彼は、そればかりでなく、グレゴール・ヨハン・メンデル (Gregor Johann Mendel) の「遺伝の法則」の研究成果を自ら進んで受け入れてもいる。その著『帝政ドイツと産業革命』における人種についてのヴェブレンによる子細に渡る討議は、メンデル遺伝学の成果のうえに初めて成り立つものである。この限りでヴェブレンは、メンデル主義の洗礼を受けたダーウイン主義者であるとの指摘を、私は次の拙稿で忌憚なく示しておいた。——Mitsunobu Sato, "Thorstein Veblen as a Mendelian Evolutionist: On his

Understanding of the Races in Europe," in *The Teikyo Journal of Comparative Culture*, No. 16, on February the 7th 2003.

(11) この事態をめぐって、ジョセフ・ドーフマンはこのように述べている。

「一九一七年のアメリカの参戦は、現代の思想に貢献する機会を与えるかに見えたが、その分け隔てのない性質がこの時も反対の運命をもたらした。アメリカ政府の公式宣伝局 (official propaganda bureau) は、ドイツを非難する論拠として新聞社を説き伏せてこの著作の一部を再発行させたが、通信省事務局 (Postmaster General's office) はスパイ防止法 (Espionage Act) に基づき、この著作を郵便物から締め出した。」Joseph Dorfman, "Introduction," in *Imperial Germany and the Industrial Revolution* by Thorstein Veblen (New York : The Viking Press, 1939), pp. xii-xiii.

(12) Stanley Matthews Daugert, *The Philosophy of Thorstein Veblen* (New York : King's Crown Press, 1950), p. 1.

(13) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class* (New York : Augustus M. Kelley, Bookseller, 1975), p. 190.
〔小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店、昭和四十三年刊、一八三〜一八四ページ〕。

(14) 確かに、変化の動因は制度に求められるであろう。だがしかし、制度の根底には、製作本能 (instinct of workmanship) があり、これが諸環境との相互作用のもとに制度を形成し、人間や社会に変化をもたらす。ちなみにヴェブレンは、この製作本能を次のように説明している。すなわち製作本能とは、「効果的な仕事に対する愛好と、無駄な労作に対する嫌悪、……役に立つことや能力を価値あるものとし、無効果、浪費、無能を価値なきものとする意向」、あるいは「実際的な便法、方法と手段、能率と節約の方法や考案、熟達、

- 創造的仕事と諸事実の科学技術的統御に関する関心」である。それゆえ、製作本能は差別の原理である。またそればかりでなく製作本能は、科学技術の発達を促す好奇本能や金銭の獲得を効率的に遂行する取得本能とも同時に結びつき、社会の厚生を促す親性本能にも直結するから、統一の原理でもある。この点で製作本能は、変化をもたらす根本的動因として矛盾した本性を持っている。それゆえにこそ、社会の諸制度とその変化過程の経済学的研究の根幹に、ヴェブレンは製作本能を置いたと見られる。製作本能こそが人間、社会および文化その他に変化をもたらす原基形態なのである。苟も、ヴェブレンの立場に依りながら、それらの諸変化への接近を企てようと欲するならば、製作本能から説き起さねばならない。このような指摘は、当然のことながら他ならぬ私自身に最も向けられるべきであるが、本稿においてこれをなすべき能力は、許されるであろう紙幅に遙か遠く及ばなかった。したがって、私はいずれ、製作本能の歴史的発現とその諸過程をめぐって、日本経済の歴史を説明しなければならぬであろう。いまのところ、この興味深い研究の概観さえ描き得ていない。膨大な歴史的現象の一齣を抽象する能力もまた、私自身に備わっていないからである。—— see, Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class* (New York : Augustus M. Kelley, Bookseller, 1975) ; Thorstein Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (New York : Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964).
- (15) この際に私は、ソースタイン・ヴェブレンの諸著作をあびておこうと思う。

The Theory of the Leisure Class : An Economic Study of Institutions (New York : The Macmillan Company, 1899) ; *The Theory of Business Enterprise* (New York : Charles Scribner's Sons, 1904) ; *The Instinct of*

- Workmanship and the State of the Industrial Arts* (New York : The Macmillan Company, 1914) ; *Imperial Germany and the Industrial Revolution* (New York : The Macmillan Company, 1915) ; *An Inquiry into the Nature of Peace and the Terms of It's Perpetuation* (New York : The Macmillan Company, 1917) ; *The Higher Learning in America : A Memorandum on the Conduct of Universities of Business Man* (New York : B. W. Huebsch, 1918) ; *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (New York : B. W. Huebsch, 1919) ; *The Vested Interests and the Common Man : "The Modern Point of View and the New Order"* (New York : B. W. Huebsch, 1919) ; *The Engineers and the Price System* (New York : B. W. Huebsch, 1921) ; *Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Time : The Case of America* (New York : B. W. Huebsch, 1923).
- (16) Thorstein Veblen, *The Theory of the Leisure Class* (New York : Augustus M. Kelley, Bookseller, 1975), p. 19. 「小原敏士訳『有閑階級の理論』岩波書店、昭和四十三年刊、二五ページ」。
- (17) William H. McNeill, *The Pursuit of Power: Technology, Armed Force and Society since A.D. 1000* (Chicago : University of Chicago Press, 1982) ; Arthur Ferrill, *The Origins of War: From the Stone Age to Alexander the Great* (New York : Thames And Hudson, 1985) ; 栗本英世著『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店、平成十一年刊；松本武彦著『人はなぜ戦うのか——考古学からみた戦争——』講談社、平成十三年刊；佐原真編『稲・金属・戦争——弥生——』吉川弘文館、平成十四年刊；金関恕／春成秀爾編、佐原真著『戦争の考古学——佐原真の仕事 四——』岩波書店、平成十七年刊。
- (18) Helen E. Fisher, *The Sex Contract: The Evolution of Human Behavior* (New York : William Morrow & Co,

1982), p. 198. [伊沢鉉生・熊田清子訳『結婚の起源』どうぶつ社、平成十年刊、二二五ページ]。

(19) ヴェブレンは、所有権の発生とその累積的成長の過程について、次のように述べている。

「女性の所有は、明らかに女性の捕虜の捕獲とともに、低度の野蛮民族の文化段階に始まる。女性の捕獲や占有の最初の理由は、戦利品としての女性の効用であったように思われる。敵方から女性を奪い取る慣行は、ある形態の財産結婚を発生せしめ、男性を家長とする家族を生み出した。これに引き続いて、奴隷制度を女性以外の他の捕虜や劣等者に拡大することか、財産結婚を、敵方から奪い取った女性以外の女性に拡張することなどが起こってきた。だから、掠奪的生活の状況のもとでの競争 (emulation) の結果は、一方では、強制に基づく結婚の一形態であり、他方では私有財産制の慣習であった。この二つの制度は、その最初の段階では区別することができない。両方とも、自分たちの手柄のなんらかの永続的な成果を見せびらかすことによって、その武勇を証拠立てようとする成功した男性の欲望から起こってくる。両方とも、あらゆる掠奪的社会に瀰漫している他を支配しようとする性向にも役立つ。女性の所有から、私有財産権の観念が拡大されて、自己の生産労働を含むようになり、かくして、人間ばかりでなく、物の所有権が発生する。」Thorstein Veblen, *op. cit.*, pp. 23-24. [前掲訳書、二九ページ]。

(20) 有閑階級が一貫した形をとって現れてくるための必要な条件について、ヴェブレンは次の二点をあげている。

(一) その共同体は、掠奪的な生活慣習 (戦争もしくは大型の鳥獣の狩猟、もしくはその両方) をもたねばならない。すなわち、このような場合の有閑階級の端緒を形作る男性は、暴力や謀略によって傷害を

与えることに慣れていなければならぬ。(二) 生活資料が十分に安易な条件で得られ、そのためにその共同体のかなりの部分のものを、常に日常労働に従事することから免除することができなくてはならない。」

Ibid., pp. 7-8. [同上訳書一五ページ]。

- (21) この点で、ヴェブレンの発展段階説は基本的に生産力説の範疇に含まれとする見解に、私は意中留保付きで同意することができる。だが、これを子細に検討するならば、そのような瞭然とした括り分けができかねるほど、彼の発展段階説には改修や追補が施されていることに気づく。技術的知識とその成長、道具の使用や機械過程の進展、自然的環境・社会的環境および文化的環境とそれらの累積的变化などにも、彼の所説は抛り所を得ている。また、もとよりそれは、製作本能に根本的に基礎づけられている以上、ヴェブレンの発展段階説に全般的評価を下す際には、余程の周到な準備を要しても余りある程と云うべきである。

(22) *Ibid.*, p. 20. [同上訳書一六ページ]。

- (23) 半平和的身分の段階についてヴェブレンは、その特徴を概説するとともに、かかる命名の適否について次のように説明している。

「文化の系列では、半平和的段階は、固有の掠奪段階に続くものであって、この二つのものが野蛮生活の相連続する様相である。その特徴は、平和と秩序の形式的な遵守ということであるが、それと同時にこの段階の生活は、余りにも多くの強制や階級対立を伴っているので、言葉の完全な意味で平和的生活と呼ぶことができない。それは、多くの目的のために、また経済的立場以外の立場から見れば、身分の段階

(stage of status) と呼ぶことができるかも知れない。この段階の人間関係の方法なり、この文化水準での人々の精神的態度なりは、身分という言葉のもとにうまく概括することができる。しかし、現在の産業方法を特徴づけ、また経済進化のこの時点では産業発展の趨勢をも示すための記述用語としては、『半平和的』という言葉の方が適当であるように思われる。」 *Ibid.*, pp. 63-64. [同上訳書、六十六ページ]。

(24) 速水融著『近世江戸の経済社会』麗澤大学出版会、平成十五年刊、三〇九〜三二一ページ。

(25) このように、生活過程のなかに競争状態を見いだすことに、何はともあれダーウイン主義者としてのヴェブレンの面目躍如たるところの一端がある。